OTC薬の添付文書を読み解く④

使用上の注意　「相談すること」　重篤な症状1

M-No.2-1から3では、鼻炎薬の添付文書に書かれている「**してはいけないこと**」について書きました。添付文書には薬を安全に用いるための注意が、重要な順番に書いてあります。第二番目に書いてあるのが「**相談すること**」です。さらに、添付文書を詳しく見ていきましょう。

★相談すること･･･相談相手は、専門家と呼ばれる医師･薬剤師又は登録販売者です。

次の2種類が書かれています。

① **OTC薬を服用する前に相談**すべき人や病気についての注意

② **服用後に起こる副作用等**の重症化を防ぐための注意

①はもちろん大事ですが、②の副作用は起これば重症になりやすいので特に大事です。今回は②として書かれている「**重篤な症状**」について読み解きます。

【添付文書の記載内容】

まれに次の重篤な症状が起こることがあります。その場合は，直ちに医師の診療を受けてください。

［症状の名称］	［症状］
ショック（アナフィラキシー）	服用後すぐにじんましん，浮腫，胸苦しさ等とともに，顔色が青白くなり，手足が冷たくなり，冷や汗，息苦しさ等があらわれる。
皮膚粘膜眼症候群（スティーブンス・ジョンソン症候群）	高熱を伴って，発疹・発赤，火傷様の水ぶくれ等の激しい症状が，全身の皮ふ口や目の粘膜にあらわれる。
中毒性表皮壊死症（ライエル症候群）	高熱を伴って，発疹・発赤，火傷様の水ぶくれ等の激しい症状が，全身の皮ふ，口や目の粘膜にあらわれる。

このような副作用は、鼻炎薬ばかりでなく、ほとんどの鎮痛薬やかぜ薬の他、多くの薬に書かれています。また、その他の重篤な症状として、「間質性肺炎」「偽アルドステロン症」「肝臓機能障害」「腎障害」「無菌性髄膜炎」「ぜんそく」が記載されている薬もあります。ごく一般的な薬剤でも起こりうるのです。といっても、そうそう起こるものではありません。では、どのくらいの割合で起こるのでしょうか？

副作用が起こる頻度を表す時に、「**まれに**」と書かれている場合には、0.1%未満、つまり、1000人以上が薬を服用して1人に副作用が起こるかもしれないということです。少ない様に見えますが、確率的に誰かに起こるわけで、薬を使う以上ゼロにはできません。

そこで大事なのは、必ず添付文書を読んで、記載されている症状の「兆し」にいち早く気づくことです。添付文書を読まず、薬剤師から説明も受けていなければ、気づきも遅れます。気づいたらすぐ、**添付文書を持って**医師の治療を受けてください。よく、薬を買って、中身だけでいいという方がいますが、必ず添付文書はお持ち帰りください。